



第110号 別冊
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
2023.9.1

特別講演会 報告書
『ブロニスワフ・ピウスツキの遺したもの』
(札幌エルプラザ、2023年3月4日)

講演1 ブロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類

佐々木 史郎

ブロニスワフ・ピウスツキは、ロシア皇帝アレクサンドル3世暗殺未遂事件に連座してサハリン(樺太)に流刑にされたことを契機にして、その地域の先住民族に関心を持ち、その後、サハリンだけでなく北海道や大陸側のアムール川流域などで民族調査を行った。特にサハリンのニヴフとアイヌとは長年にわたり交流を続け、その文化や言語を丁寧に調べている。またその経験に基づいて、帝政ロシアの植民地政策の中で貧窮化していく彼らの生活を改善させるための施策も提言している。



1. ピウスツキのアイヌコレクション

ピウスツキは調査に際して、当時最新の調査機器だった写真機と蝋管録音機を利用した。それにより、調査当時(20世紀初頭)の人々の姿がガラス乾板に写し出され、生の声が蝋管に刻まれて後世まで残されることになる。また、音声や映像のデータと同時に、彼は膨大な量の実物資料を集めて、ロシア各地の博物館に納めた。

ピウスツキが収集した写真、録音、実物の各資料は現在ヨーロッパとロシアの博物館や大学に収蔵されている。その中で実物資料は、ロシアではサンクトペテルブルクのロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館(通称クストカメラ、以下「クストカメラ」)とロシア民族学博物館、ウラジオストクのV・K・アルセニエフ記念沿海地方総合博物館、ユジノサハリンスクのサハリン州立郷土博物館に、ロシア以外ではドイツ・ライプツィヒの民族学博物館とオーストリア・ウィーンの世界文化博物館などにそれぞれ収蔵されている。

本講演ではピウスツキが収集した実物資料のうち、主にロシアの博物館に収蔵されているアイヌの

衣類とその周辺資料について述べる。

この講演は、6年にわたって実施したユーラシア北方地域の織物文化に関する調査研究プロジェクト(「北方寒冷地における織布技術と布の機能」2014~16年度と「アイヌ民族の衣文化交流」2017~19年度)の成果の一部でもある(佐々木2020を参照)。

このプロジェクトは、北方地域では珍しい独自の織物を製作する民族の布文化と衣文化についての調査研究で、サハリンの樺太アイヌは東アジア地域では独自の織機と織布技術を持つ最北の民族である。彼らの北隣のニヴフやウイльтаは布を織る技術と用具を持っていなかった。彼らにはイラクサなどの植物から繊維を取りだして糸や紐を作る技術やごぎを編むための技術と用具はあったが、織機と布を織る技術が見られない。そのような民族とアイヌとは衣文化にどのような違いがあるのか、あるいはなぜ樺太アイヌにまで普及した織機がそれ以上北進しなかったのか、といった問題を考察した(後者の問題は結局解けなかったが)。

ここでは私が調査したピウスツキ収集のアイヌの衣類を紹介し、その特徴と収集の時代的な背景についても探っていきたい。

2. ピウスツキが収集したアイヌ衣文化資料

ピウスツキが収集したアイヌ関連コレクションは、サントペテルブルク、ウラジオストーク、ユジノサハリンスク、ライブツィヒ、ウィーンなどの民族学関連の博物館に収蔵されていることがわかっている。それは1990～2000年代前半にかけて、小谷凱宣先生(名古屋大学→南山大学)とJ・クライナー先生(ボン大学)が中心になって実施された欧米の博物館に収蔵されるアイヌ関連資料の体系的な調査の結果で、特にロシアに関しては荻原眞子先生(千葉大学)が代表者を務めた科研のプロジェクトの成果である(大学名はプロジェクト当時の所属)。

まず、サントペテルブルクのクンストカーメラ収蔵資料では以下の番号がついたコレクションがピウスツキの収集とされている(Spb-アイヌプロジェクト調査団編1998)。

- 700番台(台帳記載年1903、推定収集年1902-05、
収集地:サハリン)
- 829番台(台帳記載年1906、推定収集年1902-05、
収集地:サハリン)
- 837番台(台帳記載年1904、推定収集年1902-05、
収集地:サハリン)
- 839番台(台帳記載年1904、推定収集年1903、
収集地:北海道)
- 1039番台(台帳記載年1906、推定収集年1902-05、
収集地:南サハリン)
- 2803番台(台帳記載年1903、推定収集年1902-05、
収集地:サハリン)
- 3125番台(台帳記載年1914、推定収集年不明、
収集地:サハリン)

その中には多数の衣類、布類と織機が含まれ、私のプロジェクトで調査したのは以下の通りである。

- 700-162 女性用毛皮服。アザラシとクロテンの毛皮のほか、木綿、獣毛糸、和紙。収集地:サハリン西海岸マウコ(真岡)
- 700-227a 女性用の下帯。木綿、毛織物(羊毛)、ガラスビーズを使用。収集地:サハリン東海岸
- 700-235 男性の下帯。着古されたテタラペ(イラクサ繊維の服)が材料。収集地:サハリン東海岸(大きさから見て子供用と思われる)
- 700-300 男性の下帯。着古されたテタラペが材料。収集地:サハリン東海岸(大きさから見て子供用と思われる)
- 829-373a シャマンの頭帯。木綿と絹、縫製糸と

刺繍糸は絹。収集地:サハリン東海岸

- 829-373b シャマンの頭帯。日本製の型染め木綿と装飾に綾織り絹。収集地:サハリン東海岸
- 829-374 首帯(チョーカー)。木綿(タテヨコ緋)、絹、羊毛。収集地:サハリン東海岸
- 829-406 刀掛け帯と刀。帯の基本部分は樹皮繊維のもじり編み、装飾に藍木綿、赤い獣毛糸、下がり木綿布、魚皮、木綿糸を使用。収集地:サハリン東海岸
- 829-437 織機(織りかけ)。張られている糸は草皮繊維(イラクサ)、タテ糸310本。収集地:サハリン東海岸
- 839-17 上衣(相当古されている)。地布は樹皮と木綿の交織布(緻密なタテ畝織り)、補修・補強の当て布に木綿。収集地:北海道
- 839-86 上衣。地布は樹皮・木綿交織布(タテ緋タテ畝織)、装飾に赤白の羊毛のパイル織り、糊防染型染めの木綿、縫製糸は樹皮繊維。収集地:北海道
- 839-195 男性用上衣。地布は平織りの藍木綿、切り抜き文に平織り白木綿。収集地:北海道
- 839-199 男性用上衣。地布は平織り糊防染型染め、襟にパイル織り、襟の下に平地タテヨコ緋、当て布にタテ緋タテ畝織りが使われる。収集地:北海道
- 839-184 織機。張られている糸は樹皮繊維(オヒョウ)、タテ糸314本。収集地:北海道

次にウラジオストークの沿海地方総合博物館では、904番台がピウスツキ収集のコレクションで、調査できた衣類は次の1着だった。

- 904-5 子どもの衣装。地布は草皮繊維(イラクサ)の平織り、木綿、ガラスビーズ。収集地:サハリン

ユジノサハリンスクのサハリン州立郷土博物館のピウスツキ収集資料は、ウラジオストークの沿海地方総合博物館から移管されたものだった。そのうち調査したアイヌの衣類は以下の2点である。

- 1859 maizar(前掛け)。表地は藍木綿、裏地はプリント柄の木綿。収集地:サハリン
- 1861 魚皮衣。魚皮(52枚使用)、木綿。収集地:サハリン・コルサコフ郡

3. ピウスツキの収集の歴史的背景

ピウスツキがサハリンや北海道で活発に資料を収集した年代は1902～05年である。日露戦争(19

04～05)にかかっている、そのために、ピウスツキはアイヌの女性とともに築いた家族を置いてサハリンを後にせざるをえなかった。また、彼が収集活動をしていた時代は樺太千島交換条約(1875)からほぼ30年経た時代でもあり、その間帝政ロシアは先住民族たちを実質的には統治していなかったもので、実態があまりよくわかっていない。

ロシアはサハリンをピウスツキのような政治犯や殺人や強盗事件などの刑事犯を厄介払いする島として利用するために、また石炭や石油のような鉱物資源を開発(収奪)することを目的として、サハリンを強引に領土に組み入れた。そのとき、帝政政府には先住民族を直接統治する、あるいはその安全や生活を保障するような体制を築く気がなかったようである。それは、ピウスツキの初期の報告書や論文に書かれている当時のアイヌやニヴフの状況から推測できる。当時のアイヌは江戸時代の場所請負制が廃止され、樺太千島交換条約の後には日本の役人たちも去り、その後には樺太南部を領有したロシアもアイヌに対する統治をきちんとしていなかったということで、外からの縛りから解放され、自律性を回復した状態にあった。しかし、ロシアはサハリンを流刑地に利用し、資源を収奪することしか考えていなかったため、アイヌの社会は治安面と経済面で深刻な問題に直面する(詳細は田村報告を参照)。

ピウスツキが刑期を終える前後の1897年に初めてロシア全土で国勢調査が行われた。それによれば、アイヌはサハリン南部(コルサコフ郡)を中心に55の村(コタン)、301世帯、1,442人(男761人、女681人)が数えられている。その内訳は、サハリン東海岸に29村、143世帯、736人(男396人、女340人)、西海岸に26村、158世帯、701人(男361人、女340人)、サハリンのアイヌの村以外の場所に5人(男4人、女1人)である(S・パトカノフが1912年に編集した国勢調査の報告書による)。樺太千島交換条約の結果、1875年に日本政府は841人の樺太アイヌを北海道北端の宗谷に移住させ、さらに翌76年には小樽を経由して対雁の移住地に強制的に移した。そこで半数近くが疫病等で命を落としている(田村報告参照)。ロシアの国勢調査の結果から19世紀末のサハリンには、北海道に行かなかった樺太アイヌが1,400人ほど住んでいたことがわかる。

サハリンの外ではアリューシャン列島のメードヌイ島に14人(男7人、女7人)がいた。彼らは樺太千島交換条約後のシコタン島への強制移住を拒否した千島アイヌの子孫と考えられる。また、アイヌの村落には155人(男126人、女29人)のロシア人と83人(男81人、女2人)の日本人が数えられている。

他方、コルサコフ郡全体ではロシア人5,047人(男3,752人、女1,295人)、日本人218人(男208人、女10人)が登録されている。ロシア人と日本人では男女比に大きな偏りが見られるが、それは開拓移民政策の特徴で、当初は男が中心になって入植したこと、特に日本人の場合には漁業従事者が大半だったことが関係していると考えられる。

4. ピウスツキ収集のアイヌ衣文化資料の特徴

帝政ロシア支配時代(1875～1905)の南サハリンで、アイヌに関する民族資料を体系的に集めた人物ではピウスツキの右に出るものはいないといっても過言ではない。それは彼が流刑とはいえ10年以上にわたってこの地域に住み続け、さらに地元のアイヌの女性と結婚して家庭生活を送っていたことが大きかったと考えられる。例えば、女性用の下帯(700-227a)のようなものまで収集しているが、これは通常は男性には絶対手にできない(女性でも他人には見せない)ものである。また、いかにも着古したテタラペから作ったと思われる子どもの下着(700-235と700-300)を収集しているが、これも家族を持ったからこそ手に入れることができたものと思われる。

ピウスツキが収集したアイヌの衣装を見ていて、気がついた特徴をいくつか列挙してみよう。

1) 全体的に見て素材、製作技法、デザインに伝統的なものが多く使われ、しかも現代の基準で見ても優れたものが多い。

テタラペにせよアハルシ(北海道ではアットウシ)にせよ、また魚皮衣や獣皮衣でも、伝統的な繊維素材を使用した衣類では、その織りが緻密で糸の太さもそろっているものが多く、縫製や刺繍も確かな技術で縫い目も細かく揃っていて、丁寧に作られている。それは優れた技術を受け継いだ人がまだ数多く残っていて、ピウスツキはそのような人たちが作ったものを収集することができたからと考えられる。またポーランドに残されているピウスツキの肖像画(11頁のチラシ表を参照)では、見事なアップリケと刺繍で飾られたテタラペを着用した姿で描かれているが、それは作った人の彼に対する愛情がにじみ出ているようにも見える。そのようなことも、彼が収集した衣類に見事なものが多い理由かもしれない。

2) 実際に使用されたものが数多く収集されている。

使用された痕跡がある資料は、その使用者、方法、時期、場所などの情報が付加されている点で、学術的、博物館的には価値が高い。しかし、誰か

が使用していたものを譲ってもらう(有償でも無償でも)ことはよほど信頼関係がないとできない。ピウスツキの収集した資料は彼が地元の人々に信頼されていたことを物語っており、それはやはり家庭を持ったことが大きかったのではないかと考えられる。

3)ピウスツキの収集した布類にいわゆる「蝦夷錦」が少ない。

北海道を初め日本各地の博物館には「蝦夷錦」と呼ばれる龍文が描かれた中国製の絹織物の衣類や布が時折見られる。それらは北方経由で来たもの、本州の場合には北海道から来たものとされている。しかし、それらの中でアイヌの人々が所蔵していたことが確実にわかる資料は極めて少ないのが実状である。ロシアの博物館にも龍文の衣装や布地が収蔵されているが、そのほとんどがアイヌ以外の民族、つまりニヴフ、ウリチ、ナーナイ、ウデヘなどといった北サハリンからアムール川下流域の民族のものである。樺太アイヌの衣装にも絹布や絹糸が使われており、また絹衣にも樺太アイヌのもの

とされるものがある(東京国立博物館所蔵の小袖)。しかし、それらの多くは日本製の小袖に由来する。樺太アイヌはサンタン交易を通じて大陸から結構な量の蝦夷錦の布や衣服を手にする機会があったはずなのだが、その衣装やそれを装飾に使った衣装や小物類はあまり見られない。どうやらその大半を和人の方に流してしまっていたようなのである。松前藩が執拗に取り立てたことも理由の一つかもしれない。しかしそれとは対照的に、日本製の絹織物は、小袖(コソント)のような衣装から装飾に使われた断片まで結構多く見られる。それが何を意味するのか、改めて考え直す必要があるだろう。

以上、ピウスツキが収集したアイヌの衣類について、その特徴と時代的な背景を説明した。

彼のアイヌの衣類コレクションは、彼がいかに現地の人たちに愛されていたのか、また彼もまたその人々をいかに大切に思っていたのかを物語っているといえるだろう。

(ささき・しろ、国立アイヌ民族博物館)

【参考文献】

SPb-アイヌプロジェクト調査団編1998『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館
佐々木史郎編2020『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化』(科研報告書)東京国立博物館・国立アイヌ民族博物館設立準備室

Патканов, С. 1912, Статистические данные, показывающие племенной состав населения Сибири, язык и роды инородцев (на основании данных специальной разработки материала переписи 1897 г.) Т. 3. Вып. 4-9: Иркутская, Забайкальская, Амурская, Якутская, Приморская области и о. Сахалин. (Записки Императорского Русского Географического Общества по Отделению Статистики под ред. Секретаря Стат. Отд-ния О-ва В. В. Морачевского ; Т. 11. Вып. 3).

会場アンケート集計 1 (感想・質問)

- ①自分自身江別に住んでおり、対雁に強制移住させられたカラフトアイヌについて少し知識があったので、とても興味深い内容でした。実際にアイヌの血縁の方のお話はとても考えさせられました。日本人の行った行為はアイヌに対してひどいことだったんだと改めて思いました。研究者と当事者の見解の違いがより理解し合えるとよいです。(会社員、40代)
- ②ピウスツキがのこした衣服や記録など貴重な資料を見ることができてよかった。ここまで調べられていてもなかなか分からないこともたくさんあることが分かった。また、歴史の中で日本、ロシア、中国などの国に少数民族たちがほんろうされていたことが分かった。歴史の中で国につごうのいいように左右された民族の歴史を忘れてはいけないと思う。こ

- のようなことがもっと公になるといい。(学生、10代)
- ③国立アイヌ民族博物館・佐々木史郎・田村将人両氏へ、先住アイヌ民族が日本の同化政策によっておかれてきた苦難の歴史を正しく語るとともに、アイヌ民族の立場に立って、現在も差別に苦しめられている実情に学び、アイヌの人々の権利が認められるように働きかけて欲しい。(無職、70代)
- ④あつという間の講演時間でした、織物という視点でピウスツキの遺した物を見ていく機会、おもしろい視点でした。こんなに関わりの深い文化・歴史をもっと身近に感じられる機会が増えることを望みます。カラフトの歴史が今後少しずつでも開かれていくことを望みます。(パート職員、40代)

[8ページにつづく]

講演 2

ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み



田村 将人

プロニスワフ・ピウスツキがサハリンにいた 19 世紀末から、彼が去った後の 20 世紀前半の樺太アイヌの歴史を紹介する。この間、樺太アイヌの人口は、幕末には約 2,000 人で、20 世紀半ばには 1,312 人（1944 年末、樺太庁調べ）という推移をたどった。

1. 民族名称の多様性

まずは、いくつかの民族名称から、周辺諸民族・諸国家との関りを見ておきたい。

(1) 樺太アイヌ < からふと/カラフト

日本では江戸時代から「カラト」や「カラフト」などと表記され、漢字では「唐太」などと表記されたこともあり、中国製品の交易路であったことから唐=中国につながるという説もあった【東2003】。江戸幕府によって北蝦夷地と呼ばれていたが、1869(明治2)年に明治政府によって「樺太」と制定された。これまで語源に関しては諸説あるが、アイヌ語のカラフト karapto という単語に由来すると考えられる。筆者は、日本領樺太における同化政策によって日本国民となった樺太アイヌが、ソ連侵攻の1945年以降に北海道以南の地へ和人とともに移動したことから、「樺太」の歴史と切り離せないと考えて樺太アイヌの名称を使っている。

(2) サハリンアイヌ < Сахалин/Sakhalin/薩哈隴/薩哈林

現在、一般的に使われるサハリンは、満洲語のサハリヤン ウラ アンガ ハダ sahalijan (ula) angga hada「アムール川の河口の(対岸の)岩のがけ」に由来する【池上2004】。筆者は南北に約2,000 km もの細長いあの島を呼ぶ場合に、時代を問わない地理的名称として「サハリン」を使っている。また、主に1920~25年日本軍が北サハリンを占領した際に「サガレン」という言葉が使われた。

(3) エンチウ

金田一京助は、エンチウという単語について、樺太アイヌが「enju と自分でも呼んで、enju と ainu とを併用していて、enju の方は古語で、雅語であると称している。即ち叙事詩や祈祷の語、談判語や、会釈の辞など、改まった時に用いる語で、叙事詩に「半神、半人」の英雄とたたえる時など、よく arkir kamui arkir enju というのである」と説明している。また、エンチウの「古形 emchuiu だったからこそ、エミ

チ、エミシの形が出たのであろう」と推測し「アイヌの enju が日本語になるには enjo となるはず」として、蝦夷(えみし、えぞ)という単語と関係があると指摘した【金田一1931】が現在では支持されていない。知里真志保は、エンチウは雅語で「①人。②男」という意味があるとし、マテンチウも同じく雅語で「女(女・人)」と辞典に記載している【知里1954】。

河野広道が、墓標の型式からアイヌ文化の地域差を検討した論文で、サハリンに関しては地域集団の名称として「東エンヂウ」系と、さらに北海道の余市を含めた「西エンヂウ」系として、エンチウの単語を用いて考察している【河野1931】。以上のことは、児島恭子がすでに整理している【児島2003】。

1908~11年に樺太庁の先住民族政策の担当者だった葛西猛千代は、「エンジウ これはアイヌ民族名の変体語とも申すべきもので例へば見知らぬアイヌが通行するのを見てアレハどこそこのアイヌだよと言へば、先方は聞いて不快の感を懐くからアレハ何処其処の「エンジウ」(アイヌ)だと云ふ変体語で、恰かも日本人同士が日本人を指してアレア一日本人だと云ふのを邦人だと云ふのと同じ意義である」【葛西1931】とたとえている。

これと同様の例を菊池徹夫は、戦後北海道に移住した樺太アイヌの藤山ハルさん(1900年生)から聞いた情報を次のように紹介している。「「アイヌ」と同じように、人とか人間の意味だけど、「エンチウ」は「アイヌ」よりずっと古くて立派な言葉だ。カムイに祈る時なんか使ったんだ。マオカ(真岡=ホルムスク)ではふつうの時でも「エンチウ」を使ってた。とくに、内緒話・ひそひそ話の時に使ったよ」【菊池1989】。ライチシカ出身の藤山さんは1940年代にマオカ周辺に住んでいたため、その経験に基づいているのだろう。

葛西と菊池が紹介する日常の用例に共通するのは、アイヌという単語の言い換えとしてのエンチウの使用例である。同化政策が進められた結果、1920年代以降、差別語となっていたアイヌに代わって、北海道においてウタリ「同胞」という単語が使われ始めた実態に似ている可能性がある。現在では、エンチウを自称として使用する人たちもいる。

(4) クギ、クイ、クイエ <kuyi/kui/kuye

これらはカタカナで簡易的に表記したもののだが、樺太アイヌと隣り合うニヴフ、あるいはウイльтаやナーナイ、ウリチ、満洲などのツングース系諸民族による呼称である。現在の中国の地図では庫頁 kuye 島(薩哈噠も併記)と表記され、さながら「アイヌ島」という意味になる。中国の正史には歴代、「骨嵬」(元)、「苦夷」(明)、「庫頁」(清)などの表記が登場する。

1264年以降、元に服属していたニヴフが「クギ(アイヌ)が毎年侵入してくる」と訴えたことから、元がアイヌを攻撃し戦いが続いたが、1308年、アイヌが毛皮の朝貢を条件に元に服属を申し入れて戦いが終了した。アイヌが鷹の羽や毛皮を求めて北上したことが背景にあるようだ【中村2014】。その後、清や先住民族と日本をつなぐサンタン交易が17~19世紀にかけて盛んにおこなわれた【佐々木1996】。

2. 19世紀後半における樺太アイヌの2度の大移動

先住民族の生活にも影響を及ぼすようになったサハリンをめぐる日露間の外交関係を概観する。1875~1945年の間に、集団としての大きな移動が3回もあったことに注目したい。

1855年日露親善条約によって択捉とウルップの間に国境画定したが、サハリンは未画定のままとなった。1858~60年アイグン条約と北京条約によってアムール河の露清国境が、ほぼ現在と同じように画定した。1868年カラフト島仮規則によって、サハリンは日露雑居=共同領有ということを確認。ロシアはサハリンを流刑地とする。1875年樺太千島交換(サンクトペテルブルク)条約によってサハリンの全島がロシア領に、千島列島全部が日本領になる。同条約附録第4条により、先住民族は3年以内に日露どちらに属するか決定できるとしていたが、サハリンから撤退する日本の政府は、サハリン最南部のアニワ湾沿岸に住む、とくに日本の漁業家との関係が深かった樺太アイヌ841人をまず北海道の宗谷へ、翌1876年に札幌近郊の対雁に強制移住した(1回目の集団としての大きな移動)。この対雁に日本で初めてアイヌ児童のための学校が設立され、卒業生の中には上級学校へ進学する者もいた。石狩川河口に漁場が割り当てられる。農業も勧められるがなじまなかった。その他、製網所での労働に従事した【樺太アイヌ史研究会編1992】。

なお、北海道において約350人がコレラなどの流行病で亡くなり、残った約10人以外は、すべて1890年代から1905年にかけてロシア領サハリンへと帰還した(2回目の集団としての大きな移動)。こ

のように、ひとつの民族集団の約半数が新たにひかれた国境を跨いで2度も移動し、さらに北海道でその約半数が命を落としたという事件は多くの人が知るべき歴史である。

ピウスツキによる1905年1月の統計では、樺太アイヌの人口は1,362人で、うち203人は北海道からの「日本国籍を有する」帰還者だったと記録されている【井上2018】。このことから、サハリンにそのまま暮らしていた約1,100人は、ロシア領で刑期を終えたロシア人や、脱走囚による強盗、殺人などの事件に巻き込まれることになった【田村2011】。

3. プロニスワフ・ピウスツキが来たころ

1887年、ピウスツキは政治犯としてサハリン島に送られた。1897年の刑期終了後、帝室科学アカデミーからの依頼を受けて樺太アイヌ、ニヴフやウイльтаなどサハリン先住民族の言語・文化調査を行った。口承文芸や民族誌等の論文のみならず、物質資料、写真資料、音声資料など多岐にわたる資料を残した【沢田2019】。1902~05年、サハリン島軍務知事らの資金によって、樺太アイヌのための学校を作り、教師にはニヴフ男性のインディンのほか、北海道から戻った千徳太郎治や、ロシア領サハリンで生まれ育ったトウイチボが就いた【田村2013】。

19世紀末、日露関係が悪化し1904年2月に朝鮮半島や中国東北部を戦場として開戦した。サハリンが戦場となるのは日露戦争の最終盤の1905年7月だが、日本人と関係が深い樺太アイヌに対して、ロシア人の態度は冷ややかになっていったようだ。その当時の様子をピウスツキが記録している。「学校の子供たちはほとんどが親に引き取られた。そのうちの何人かは、万が一のときには親と一緒にいて、共に死にたいともらした。実際、誰も理性をなくしたように思われる不安な時になっていた。〔中略〕アイヌの立場は危機的であった。アイヌが日本人に対して非常な共感を持っていることを、皆は知っていたから、サハリン占領の時が近づくにしたがって、敵の侵攻が望ましく、また、いずれにしても危険ではない人びとに対する憎悪はますます深まった」【荻原2000】。経済的にも軍事的にも大きな力を背景とした日露という国家及びその国民の間で、先住民族が危険な状態に置かれたことも再認識しておきたい。

ピウスツキは軍務知事からの依頼で、樺太アイヌに関する生活実態調査を行い、統治規定草案をまとめて提出していたが【井上2018】、彼自身は日本軍が上陸する以前にサハリンを離れ、樺太アイヌの居住地が日本領になったため施行されることはなかった。

4. 日露戦後の日本統治時代

1905年9月に日露講和(ポーツマス)条約が締結され、北緯50度以南が日本に割譲された。1907年3月までは樺太民政署が、それ以降は樺太庁が統治した。葛西猛千代は、ある樺太アイヌ首長の日露終戦当時のエピソードとして、次のような内容を紹介している。月40円でロシア軍の通訳をしていたが、裏では日本人の“片割れ”として日本軍の勝利を望んでいた。だが、戦後、我われの漁場は入札によって和人のものになってしまった。ロシア領時代は“放漫”なやり方でとても都合が良かったのにと、役人に不満を述べるものだった【葛西1928】。

またしても、日露間で国境が変更されるにあたり先住民族の地位に変化があったことになるのだが、このポーツマス条約では日本領になったサハリン南部の先住民族の処遇を詳細に決めず、日本の漁業者のために1905年秋の操業を復活させることを優先したのだった。そのようなことが上記の不満につながっていた。

つまり、1875年の樺太千島交換条約の締結以降ロシア領サハリンに居住していたロシア国籍の樺太アイヌやウイльта、ニヴフなどのサハリン先住民族の処遇がポーツマス条約で決められなかったのだ(ただし、北海道から戻った樺太アイヌは日本国籍)。そして、ロシア革命によってソ連政府が樹立されると、国外にいる旧ロシア国籍者に対してソ連国籍の取得希望者に関する公告が出されたが、結果としてサハリン先住民族から名乗り出る者はいなかったという【加藤2022】。その結果、旧ロシア国籍のサハリン先住民族は日本国籍を持っていると判断され、日本政府は1933年に、旧ロシア国籍の樺太アイヌを全員日本の戸籍に編入することになった。同時に、男性は日本兵として徴兵されることになった。ただし、ウイльтаやニヴフは無籍のままとされ、結果として日本軍にスパイとして利用されることになった【田中了・ゲンダーヌ1978】。

樺太庁は先住民族を1908年頃から約10か所に集住した。家屋を支給し、日本語学校を設置し、教員や「指導員」が配置された他は、原則として先

【参考文献】

- 東俊佑2003「サハリン島をさす呼称:「カラフト」の語源に関する覚書」『アジア文化史研究』3、東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻
- 安部洋子2015『オホーツクの灯り～樺太、先祖からの村に生まれて～』クルーズ
- 池上二良2004『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会
- 井上紘一2018『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта～』東北アジア研究センター叢書63

住民族だけが暮らす人工的な村落が造成された(次第に和人も混住するようになる)。勸農を主とした北海道旧土人保護法は施行されず、集住村落の近くに設定された「土人漁場」という定置漁場からの収益を先住民族政策費に充てた。いわば、先行していた北海道における同化政策とは異なる内容が日本領樺太で実行された。河川におけるサケマスの捕獲は制限付で「許可」されていたことも、北海道アイヌへの政策と異なる点だった【田村2010】。

5. アジア・太平洋戦争による3度目の大きな移動

1945年8月9日、ソ連軍が日本領樺太や旧満洲に侵攻した。このため、直後から北海道への脱出が始まった。1946年12月、GHQとソ連によって引揚船での日本国民約27万人の移送が開始され、1949年にかけて、樺太アイヌ約1,200人が北海道へ移住した(3度目の大きな移動)。

筆者は、樺太アイヌにとって〈故地〉であるサハリンをなぜ離れる決意をしたのかインタビューしたところ、次のような回答があった。上記のような同化政策のため、日本国民になっていたという自覚があったから。また、日本兵はソ連占領下のサハリンに戻れなかったことから、家族が再会する地として北海道以南の地へ移動する必要があったから。また、戦前の日本における反共政策や日ソ戦争を経て、ソ連政府への嫌悪感があったから(ソ連人は悪い人たちじゃなかったという感想も多い)。この結果、樺太アイヌは北海道を中心として各地に移住した【田村2008】。

まとめ

長い間、樺太アイヌは中国や、ロシア、日本という巨大な軍事力、経済力を持った国家間で翻弄されてきたが、その中にもあっても、サンタン交易や、独自の文化や技術を活かせる機会があった。しかし、日露の国境紛争がはじまってから、とくに日本領になってからの同化政策によって日本国民となり、3度の大きな移動の結果、現在では樺太アイヌのほとんどが日本に住むようになった。ピウスツキが記録した時代は、このような長い歴史の一コマだったといえる。

(たむら・まさと、国立アイヌ民族博物館)

- 荻原眞子訳2000「B. ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6
 葛西猛千代1928『樺太土人研究資料』
 葛西猛千代1931「アイヌ民族名」『樺太』3-7、樺太社
 加藤絢子2022『帝国法制秩序と樺太先住民—植民地法における「日本国民」の定義』九州大学出版会
 樺太アイヌ史研究会編1992『対雁の碑』北海道出版企画センター
 菊池徹夫1989「蝦夷(カイ)説再考」『史観』120
 金田一京助1931「アイヌ語学講義」(再録:『金田一京助全集』5、三省堂、1993)
 河野広道1931「墓標の型式より見たるアイヌの諸系統」(再録:『河野広道著作集1 北方文化論』北海道出版企画センター、1971)
 児島恭子2003『アイヌ民族史の研究—蝦夷・アイヌ観の歴史の変遷』吉川弘文館
 佐々木史郎1996『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会
 沢田和彦2019『プロニスワフ・ピウスツキ伝 〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』成文社
 田中了、ゲンダーヌ・ダーヒンニェニ1978『ゲンダーヌ—ある北方少数民族のドラマ』現代史出版会
 田村将人2008「樺太アイヌの〈引揚げ〉」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版
 田村将人2010「樺太庁による「土人漁場」を中心とした先住民政策の概要」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史:北方文化共同研究報告』北海道開拓記念館
 田村将人2011「先住民の島・サハリン:樺太アイヌの日露戦争への対処」原暉之編『日露戦争とサハリン島』北海道大学出版会
 田村将人2013「異民族に関する法律作成についてのサハリン島武官知事官房ファイルに見るピウスツキの事績」沢田和彦編『ポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』埼玉大学教養学部・大学院文化科学研究科
 知里真志保1954『分類アイヌ語辞典 人間篇』(再録:『知里真志保著作集 別巻Ⅱ』平凡社、1975)
 中村和之2014「中世・近世アイヌ論」『岩波講座 日本歴史』20

会場アンケート集計2 (感想・質問)

- ⑤ 江戸時代末から第二次大戦終了までのアイヌ等の動きの概要が理解出来てとても有意義な講演会だったと思う。最後のエンチュウのお話、とても関心がありました。今日の表題の講義からは主旨が違ふと感じた。意見交換出来る雰囲気はなくて残念。別の機会にしっかりと聴きたい話ではあります。(アルバイト、60代)
- ⑥ ポーランド人ピウスツキとカラフトアイヌのかかわりがわかりやすかった。色々勉強になりました。ありがとうございました。正しく学ぶこと大事ですね。(主婦、70代)
- ⑦ アイヌの衣類については、白老や網走などで多くの展示物を見学しましたが、繊維についてや織り方についてなど細部までは知れませんでした。今回の佐々木先生のご説明で知ることができて大変勉強になり楽しい講演でした。樺太アイヌの歴史については、私が住んでいる江別にも関連があり大変興味がありました。田村先生の説明によってより詳しく知ることができました。(会社員、40代)
- ⑧ 樺太アイヌの歴史、織物文化など大変貴重なお話、興味深きかせていただきました。ありがとうございました。最後に大変貴重なお話がきけてよかったです。
- す。当事者を講演者としてきちんと話をうかがう時間をとってプログラムに含めて欲しかったです。(本日のイベントが実質的に樺太アイヌに関するものでしたので。スラブ・ユーラシア研究センター研究員、30代)
- ⑨ テーマから話が広がっていく事で、元々の事を多くの日本人が知らない事柄だと再認識した。田澤氏のお話の時間があつたのが良かった。(会社員、50代)
- ⑩ 研究者や当事者目線のお話を聞くことができ嬉しかった。この場に足を運ばなければわからないことを知ることができて、本当によかった。貴重な機会であった。(無職、30代)
- ⑪ たまたま小説『熱源』を読んでいたもので、内容がかぶり、理解した部分もありました。短い時間内に多くのお話しは難しい！(パート、70代)
- ⑫ エンチュウの方のお話が心に響いた。我々は自分達の負の歴史にもっと目を向けていかねばならない。(無職)
- ⑬ とても興味深い講義でした。時間がもう少しあると良かったです。(無職、60代)
- ⑭ 時間が足りず残念でした。もっとゆっくり聞きたかったです。(自営業、60代)
- ⑮ アイヌの人達自身の話が聞きたいと思う。(主婦、60代)
- [以上]

感想1 ピウスツキが記録した樺太アイヌの歴史に光を！ 野間 令

故木村保和氏のご冥福をあらためて心よりお祈り申し上げます。遺骨返還の厚い壁を動かそうという大事な時に木村氏を失ったことは本当に大きな痛手です。木村氏がピウスツキやチュフサンマにみやげ話をたくさんもって逝ってくださることを願っています。



この日の講演では、国立民族博物館所属の田村氏がその講演の中で、何のために「エンチュ」ということばの由来を話そうとしたのか理解に苦しみました。研究者が教えを垂れる、というやり方が今でもまかり通ることに怒りを覚えます。

エンチュ末裔にとっては子どもたちにアイヌのことは何も教えようとしなかった大人たちの会話から、子ども心に残ったアイヌ語「エンチュ」はお互いを呼び合う自称でした。そして残された大事な樺太アイヌ語です。学説ではなく現在に生きていることばです。

「エンチュというのは河野広道が勝手に言っている」と握造するのは、当事者の声を尊重できない身勝手な研究者の言い訳だと思います。墓標の共通性はそこにその墓標を受け継いできた人々の生活と歴史の痕跡がある、ということに違いありません。「樺太アイヌ」とか「北海道アイヌ」とか地域を限定しようとするから見えてこない。樺太だけではないエンチュの生活、歴史の領域をのびのびと広げてみていきたい。「樺太」アイヌという必要はない、アイヌでいいんだ、と言う声が聞こえてきそうです。

自分の先入観と合わないことを否定する前に、

当事者の声と向き合って欲しい。田村氏は過去にも何度も田澤に抗議を受けながら、自らの主張に固執する稀有の人に見えます。そこにエンチュへの侮蔑の表情を見てしまうのは私だけでしょうか。

エンチュ協会会長田澤はその世代では、親やばあちゃんから直接樺太のことを聞き取って、そのアイヌの精神を受け継いでいこうとする稀有の人です。ピウスツキ研究者の井上絃一先生の支援を受けてエンチュ協会が設立されてから24年も経とうとしています。会長田澤の訴えとその人柄が理解されるようになってきました。=上写真=

もう一つ、皆さんに知って欲しいことがあります。樺太から持ち去られて日本各地の帝国大学に研究用として保管され続けてきたエンチュの遺骨は、未だ各大学で管理されています。故木村氏とご縁のある遺骨も同様に留め置かれています。エンチュの遺骨は樺太へ帰還し、土に還されることをめざしています。誤解や偏見を排して、遺骨がふるさとに還ることを支持していただけますよう、心からお願います。（のま・れい、エンチュ協会賛助会員）

感想2 Pilsudskiana の裾野拡大を 井上 絃一

「プロニスワフ・ピウスツキに関する総合研究」（私は同研究領域を“Pilsudskiana”と命名するよう呼びかけています）に従事する我々は概ね、ピウスツキ本人並びに彼の仕事の究明に特化して各自の研究を進めてきました。

その結果、彼が人類学者としてサハリンや北海道で実践したフィールドワークの成果はかなり解明できたものの、ピウスツキと「同じ立場」からアイヌの文化・歴史を追求する作業は大幅に立ち遅れています。

北海道ポーランド文化協会が今般、この課題と果敢に取り組まれたことを高く評価します。

第2次大戦後、父祖の島を去って日本への移住を強いられたエンチュ（樺太アイヌ）の人々は概ね、アイヌ差別を回避するべくエンチュ出自を秘匿して「日本人になる道」を選択し、その言語や文化の伝承は中断されました。それでも在日2世の田澤守さんたちは2001年、失われたエンチュ・アイデンティティの再生を求めて樺太アイヌ協会を創設しました。2018年にはエンチュ遺族会を別途に立ち上げ、国内外の諸機関が収蔵するエンチュ遺骨の返還運動

にも邁進しておられます。

したがって、佐々木史郎、田村将人両氏のプレゼンへ、田澤守さんが激しい反応を示したのも理解できます。彼はきっと、議論を受け止めてもらえそうな研究者との巡り会いに励起されたのでしょう。しかも両氏は田澤さんを対等な相手としつつ、沈着丁寧な応答に終始されました。

この状況はピウスツキとインフォーマントの関係性を彷彿させます。このような出会いの場が今回限りではなく、今後とも頻繁に設営されるよう願ってやみません。もしそれが成就するならば、Pilsudskiana はその裾野を大きく広げることになるでしょう。

（いのうえ・こういち、北海道大学名誉教授、本会会員）

=写真= (奥)井上絃一、(手前)小笠原正明



感想 3

歴史の事実はどこにあるのか 池田 裕子

春の訪れを感じさせるような前日から、打って変わって冬に逆戻りしたかのような2023年3月4日(土)、北海道ポーランド文化協会主催の特別講演会「プロニスワフ・ピウスツキの遺したもの」に参加した。当日は久しぶりの対面開催ということもあり、70人ほどが集まっていた。

ピウスツキとは、サハリン島に政治犯として送られた経験を有するロシア帝国生まれのポーランド系民族学者である。島では先住民らと交流し、「識字学校」を開いた。刑期満了で退島後、1902～05年にかけてロシア帝室科学アカデミーの委嘱によりサハリン先住民の文化や言語の調査を行った。講演会は当時の先住民らとピウスツキとの交流の一部を紹介する内容であった。

第一報告では、そのコレクションから浮かびあがるアイヌの繊維製品に見られる高い技術やセンス、そして何よりも島が多様な文化交流の拠点だったことを示す資料が紹介された。先住民たちの生活民具は彼らの家族に対する愛情を鮮やかに残す。普段、文献資料にばかり注目している筆者にとって、それは新たな眼が開かれた思いがした。

第二報告では、ピウスツキとの交流が深かったアイヌ民族に焦点を当て、大国のなかでもとりわけ影響の強かった日本に翻弄された歴史を繙いた。講演は、ピウスツキのサハリン滞在が先住民らに及ぼした影響の大きさを改めて確認する機会になった。

事後、報告で言及された「エンチウ」(樺太アイヌ語に古くからある「人」を意味する雅語で、現在は樺太アイヌにルーツのある人々が自称として用いている)という言葉に関して、当事者の認識や実感とのずれについての質問があった。この言葉の研究上の歩みについては、20世紀前半に金田一京助が語源を問い、河野広道が調査の過程で使用した後、それが誤解を生みつつ受け取られているとの指摘がある。他方で日常語としてのエンチウの使われ方

の歴史については、幾つかの報告はあるものの、詳細はわかっていないⁱ。

歴史をテーマに選んだ研究者は、その分野の先行研究とどのように対峙するのか、その際、自らの依拠する資料をどのように選び、用いるのかという問いと常に向き合っている。そうした問いから出発し、学術的検証を経て確定し得る歴史の事実を、言葉を尽くして伝えていくことが求められる。

日本領の南樺太には、領有初期を除いて9割を超える内地人(ヤマト系住民)のほか、アイヌ、ウイラタ、ニヴフ、エヴェンキ、ウリチ、サハなどの北方諸民族、そして時期にもよるが、「満洲国」人、中華民国人、旧露国人、ポーランド人、ドイツ人、トルコ人などの外国人がマイノリティとして暮らしていた。しかし当時の樺太社会には、彼らに対する尊重と共生の論理は存在していなかったⁱⁱ。

これからの日本社会においては、多様な民族的背景をもつ人々が、一人ひとりの人間同士として尊重し合い、ともに生きる社会を作ることが重要である。そのためには、当事者はもちろんのことだが、今回のような学びと交流の場に足を運ばない人々にも広く共有し得る歴史像の構築が課題であるというメッセージを受け取った、得がたい時間であった。

(いけだ・ゆうこ、東海大学教授)

ⁱ 児島恭子『アイヌ民族史の研究—蝦夷・アイヌ観の歴史の変遷—』吉川弘文館、2003年、113頁

ⁱⁱ 池田裕子「樺太のマイノリティはどう生きたのか」『歴史評論』857号、2021年、30～31、39頁

感想 4

エンチウはどこから来て、どこへ向かったか 小笠原 正明

今回の講演会は一見荒れたような印象がありますが、見方によっては望ましい展開だったように思います。佐々木先生は、織物を通して樺太アイヌの存在感を示しました。田村先生には、近代における樺太アイヌ研究の成果を分かりやすく説明していただきました。学問ですから、定義された用語でデータやモノを根拠に議論せざるを得ないわけで、その条件のもとでなすべきことをなしたと思います。

その一方で、講演会の最後で爆発したエンチウ代表田澤守さんの、行き場のない怒りも理解しなければならぬと思います。客体として、つまり研究の対象としたときの見方と、主体として、つまりかつてそこに住み今も所を変えて生き続けている者としての見方は自ずから違うということです。そもそもエ

ンチウの代表者は現在一般に通用している「樺太アイヌ」の概念を受け入れていないように感じられました。これは重要な問題です。

このギャップは大きすぎて容易に越えられないとしても、時代区分ごとに高度に専門分化する前に、「エンチウ」を主体とし、時間軸を長くとって見直し

てみれば、新しい視界が開けるかも知れません。

西エンチュウの故地と考えられるサハリン南部の西海岸は謎に満ちた地域です。オホーツク文化の専門家は、この地域を、オホーツク文化南下の根拠地だと同定しています。土器型式でいうと鈴谷式文化人の櫛目文グループが重要です。同地域の先住者縄目文グループは縄文の直系ですが、こちらの方は大陸起源です。この人たちは高度に発達した漁撈技術を持つ海洋民で、宗谷海峡を経てオホーツク沿岸に移動してオホーツク文化を広げたとされています。この民族はニヴフともウリチとも言われていますが、仮にその人たちも西エンチュウと呼ぶとしたらどうなるのでしょうか？

これまでの北海道考古学では、オホーツク文化のみ注目されて、日本海沿岸を南下して利尻・礼文、天売・焼尻を経由して石狩湾、余市に向かった人たちのことはなぜか無視されています。これはオホーツク文化期においても、その前でも後でも起こり得ることです。北海道のオホーツク海沿岸は冬季に流水でとざされ漁撈活動は制限されますので、海洋民にとってはむしろ日本海側の方が魅力的だったはずで、このルートで相当数のエンチュウが移動し、在地勢力と混血して後にアイヌとされていた可能性があります。河野本道先生も、西エンチュウの墓標は青森県是川でも発見されていると書いています¹⁾。余市や天塩のアイヌが自分たちを西エンチュウ

だと思っているのは不思議でも何でもありません。

10年以上前、私たちが取り組んだ琥珀平玉の産地分析の結果からも、すでに紀元前後に似たような流れがあったことが示されています²⁾。それを担った人々をエンチュウと呼ぶことはできないとしても、2千年も前から人々は宗谷海峡などものともせず、行ったり来たりしていたことは確かです。縄文文化は日本固有の偉大な文化でサハリンにも及んだが、その逆の流れはありえないという不思議な考え方をする人が大勢います。しかし、最近では、北海道において縄文文化に続く「続縄文文化」の時代に「生業」の転換があった、つまり生活のうえで縄文と続縄文の間には大きな違いがあったことが注目されつつあります。そのような変化を引き起こした人々は学術用語として定義されている「樺太アイヌ」ではあり得ないにしても、「エンチュウ」ではあったかも知れません。

田澤さんの怒りは西エンチュウの存在が(あるいはその名前さえも)無視されていたことに向けられていると思います。この特別講演会もこの発言でバランスが取れたと感じました。

(おがさわら・まさあき、北海道大学名誉教授、本会会員)

¹⁾ 河野本道著、「アイヌ」-その再認識～歴史人類学的考察、北海道出版企画センター、1999.11

²⁾ 小笠原正明; 原奈々絵、北海道の続縄文遺跡から出土した琥珀製平玉の産地同定とその流通、日本文化財科学会誌(84)、37-57、2022

報告

特別講演会では、白老町・国立アイヌ民族博物館の

①佐々木史郎館長が「プロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類」、②田村将人資料情報室長が「ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み」と題して講演されました。

参加者は70人を超え、情報豊富な講演のあと、エンチュウ協会の田澤守会長や井上絃一北大名誉教授らも発言し、熱い討論が行われました。



=上写真=左から 長田佳宏平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長(司会)、田村、坂本、佐々木、安藤、熊谷敬子(企画担当)=尾形秀秀撮影=

2023 3/4 (土) 18:30~20:30 札幌エルプラザ 4F 大ホール (他8回3)

毎年プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催してきました。今回、今年度は特別展として、ピウスツキが1865-1866年に採集したアイヌの衣類を展示し、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの交流の歴史を明らかにしていきます。アイヌの衣類の展示は、アイヌ文化の歴史を伝える重要な資料です。アイヌの衣類の展示は、アイヌ文化の歴史を伝える重要な資料です。

講演者: 田村将人(資料情報室長)、佐々木史郎(館長)

入場料: 大人 1000円、中学生以下 500円、小学生以下 300円

申込先: 国立アイヌ民族博物館 電話: 011-850-1111

講演会プログラム

18:30 開会式

19:00 講演: 田村将人(資料情報室長)「ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み」

19:30 講演: 佐々木史郎(館長)「プロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類」

20:00 質疑応答

20:30 閉会式

=左図=チラシ表/裏

講演会に先立ち、寄付金贈呈式が行われ、坂本純一郎氏から安藤厚会長に目録(50万円)が手渡されました。



=右写真=

寄付を終えて～パスを繋ぎ、未来を共に編んでゆく 坂本 純一郎

毎年十一月の東京の隠れた風物詩、「ポーランド映画祭」。主宰者、小倉聖子さん(VALERIA 代表)には数年前に企画したあるイベントでご登壇頂き、特長ある映画作品群の解説に留まらず、映画祭主宰に至る私的人生の道程を振り返って頂いた。また、ご主人のコモロフスキ・マチェイさんにはポーランド伝統料理のレシピをご提供いただいた。

この出会いの後、小倉さんの SNS 上の投稿から、北海道ではポーランドとの文化交流を行う市民団体と「アイヌの人々」との交流が盛んらしいと知った。

2019年には幸運にも、日ポ国交樹立百周年記念エッセイコンテスト*で入賞した。そこではヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日大使の創作演劇『祖霊祭 DZIADY』について熱心に綴る青年もいた。当時は興味を持てなかったが、数年後にふと読み始めて驚き、その後、何度も読み返すことになった。

先住民族アイヌの人々との数奇なご縁、そしてポーランドの祖霊祭への素朴な驚きが、貴会への寄付実現に至る確かな手掛りとなっていった。

さて多大な労力を掛けて、なぜ寄付するのか？私が(ポーランド以外に)中国とも縁が深いことが理由の一つである。孫文の辛亥革命で中華民国が誕生する前後に、革命を経済的に支援し続けた梅屋庄吉の生き様に影響を受け、さらに曾孫の小坂文乃さんが現代もその史実を日中の次世代へ地道に伝え続けている姿を知り、私自身も彼女と出会い魂が震えたことを鮮やかに思い出す。

社会人となり北海道を出て三十有余年。いずれ故郷にも貢献できたらと思案していた矢先でもあった。社会貢献のさまざまな形と故郷への想い。こう書けば、この寄付が初めから約束された取組と映ってしまうかも知れない。

そこで、細やかながら私の物語を語りたい。今回は、株式会社三菱 UFJ 銀行の『役職員が企画実施する社会貢献活動』の取組への5回目の入選だった。

これまで、日ポ間の貴重な歴史的事実を調査した学術書(『ポーランド児童救済事業の記録』2021)の出版費用、全国優勝の若手ピアニストを海外(ポーランド)マスタークラスへ派遣、そして(コロナ禍の緊急事態宣言により露と消えたが)ある外国語大学へマイナー言語による司法通訳の共同研究への助成等、さまざまな取組を協働し、喜んでいただけた。

しかし、前回初めて苦杯をなめた。ある芸術家の大作の保全維持活動へ寄付する提案が、作品テーマの政治性を指摘され、銀行の社会性の観点からも、風評被害の懸念ありとして却下された。

最終締切日が二週間後に迫り、天を仰いだ。その時、ふと貴会の名前が浮かんだ。それまでは優先順位が低くなっていたが、まるで北へ行くと見えない力で後押しされた感覚を覚えた。

だが、試練は続く。締切前日に提出した提案が、結果発表の二日前にまたもや却下されたのだ。信じ難いことに、当初の本部担当者は翌日から長期休暇に入ってしまった。最早ロスタイムも無いのか。

一人もがいていたその時、日本社会はサッカーW杯での日本代表チームの躍進に大きく沸いていた。「三苦の一ミリ」と呼ばれ息詰まるVAR判定となった究極のプレーが世界の注目を集め、賞賛されていた。——光が見えた。

正直にいう。私は賞賛は要らないが、「坂本の一ミリ」が本部との駆引きを制したことを知ってほしい。零円から満額獲得までの逆転劇は、魂を込めた攻防の帰結だった。その後の一か月にわたる延長戦で、一ミリに賭けた強い意志が、会員諸氏の文化継承者としての矜持に火をつけたなら、大変うれしい。

北の大地でポーランドとの交流に貢献されてきた貴会が、グローバルな視座とアイヌ民族との共生から得た知見を、ダイバーシティの確かな歩みのためにご提言され続けることを切に願っている。

(さかもと・じゅんいちろう、三菱 UFJ 銀行)

(謝辞)本講演会は株式会社三菱UFJ銀行様より社会貢献活動の一環として50万円のご寄付を頂き、その一部を活用して実現しました。他にも、ポーランド及びアイヌ文化に関する書籍・映像資料等を中心に充実させていただきました。篤く御礼申し上げます。(会長 安藤厚)



発行 北海道ポーランド文化協会

〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方

TEL・FAX 011-556-8834, hokkaidopolandca@gmail.com

東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付

TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

ポーレ編集委員会

安藤厚／新井藤子

池田光良／氏間多伊子

熊谷敬子／松山敏



POLE no.110-2 (September 2023)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Record of the Special Lectures "The Legacy of B. Piłsudski" 04/03/2023

Ainu clothing collected by B. Piłsudski (S. Sasaki)	1
The history of the Sakhalin Ainu around the time B. Piłsudski came and afterward (M. Tamura)	5
Comments (R. Noma, K. Inoue, Y. Ikeda, M. Ogasawara) and questionnaires	9